

土はひとりでに実を結ばせる

マルコによる福音 4:26-34

「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず莖、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」 イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

説教

マルコ福音書には4つのたとえ話が4章にまとめてあります。きょうはそのうちの2つ「成長する種」「からし種」を朗読しました。のこりの2つは「種を蒔く人」「ともし灯」のたとえです。4つのたとえの内、3つはマタイやルカにも並行して記載されていますが、「成長する種」のたとえはマルコ福音書にしか記録されていません。口の悪い学者にいわせると、ひとりでに実を結ばせるたとえ話は、どう料理しても説教・教訓にならないのでマタイ・ルカは割愛したのだろうなどと言っています。たしかに種を蒔くだけであとは寝ていれば土はかつてに豊かな実をむすばせる、というのはなしは怠け者のすすめみたいに聞こえます。そういえば果報は寝て待てという諺があり

ました。イエスがこのたとえで伝えようとした真意はなんだったのでしょうか。

ところで地頭（じあたま）ということばがあります。

大学などでの教育で与えられたのでない、その人本来の頭のよさ。一般に知識の多寡でなく、論理的思考力やコミュニケーション能力などをいう。「地頭がいい」
「地頭を鍛える」（デジタル大辞泉より）

辞書の説明はこうなっています。この「成長する種」にでてくる「種を蒔く人」を地頭をキーワードにして読んでみるとどうなるでしょう。

- 1.土に種を蒔く
- 2.夜昼寝起きする
- 3.種は芽を出し成長する
- 4.その人はどうしてそうなるのか知らない
- 5.土はひとりでに実を結ばせる
- 6.実が熟し時がくると収穫する

こうやって並べてみても、種を蒔いただけで肥料もやらなきゃ雑草むしりもしない、やりっぱなし、食って寝て起きてを繰り返しているただの怠け者のようです。ちょっと気になる4項目目「どうしてそうなるのか知らない」も、怠けていないで少しは研究すればというつつこみもいれたいくなります。でも地頭というのは勉強して得られるものではない、と辞書にも説明があるので「知らな」くて結構なのでしょう。ここがこのたとえの勘どころです。この種を蒔く人とおなじように、わたしたちも「どうしてそうなるのか」知らなくてもかまわないのです。

「神の国は次のようなものである」とイエスはまず語り、それから「成長する種」のたとえが始まります。つい怠け者のほうに目がいてしまいましたが、神の国のたとえとして読んでみると、種を蒔いたらあとは刈り入れるだけのよい土地です。まさに神の国です。

神の国を求めるといふこともこれと同じことなのかもしれません。イエスを救い主と告白する。そうすればあとは「夜昼、寝起きしているうちに、成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない、救いの時がくれば救われる」救い の時までにはいろいろなことがあるかもしれません。でもわたしたちも「成長する種」のように夜昼、寝起きしているうちに神さまが成長させてくださいます。

わたしたち一人ひとりがイエスの「成長する種」のたとえを理屈をこねずに、素直な地頭で、受け止めることができますように。